

# あるむせお

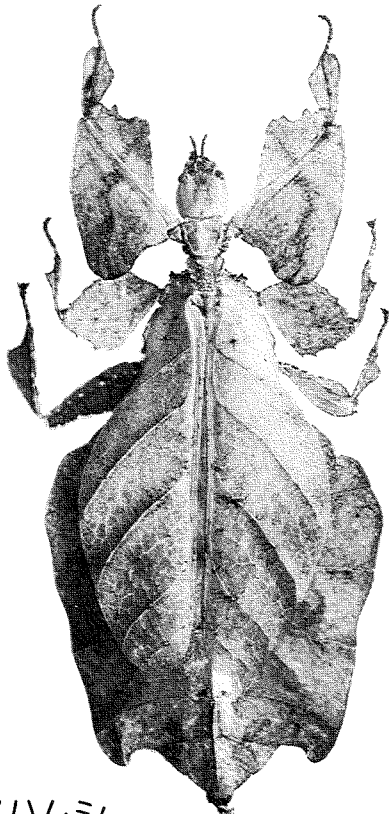
府中市郷土の森だより

No.32

al museo



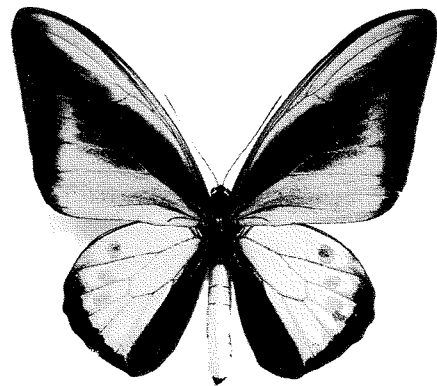
アトラスオオカブトムシ



コノハムシ

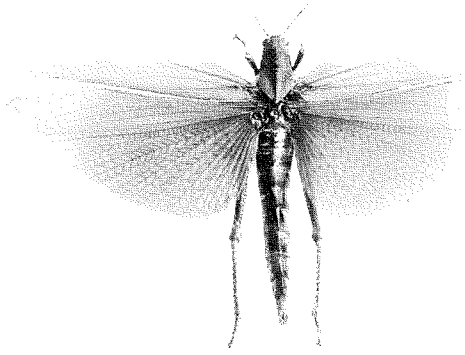
## 特別展 世界の 昆虫博

会 期:7月20日(木)~9月3日(日)



ゴライアストリバネ

地球上に生息する多種多様な生物のうちで、特に昆虫の種類数は、わかっているものだけで100万種近くを数えます。これは実に全動物の8割以上を占めていることとなります。わずかな環境の違いにも対応でき、進化を重ねていく上で多様な変化を遂げてきたことが、これだけ昆虫を繁栄させる結果につながってきたのでしょう。



## アオバミドリバツタ

昆虫が昆虫になり得た最大の理由は、<sup>はた</sup>翅をもったことにあります。飛べるようになったことで、行動や生活範囲が地上から大空へと拡大しました。水平方向への移動だけではなく、垂直方向への移動も容易となり、木の根元から樹冠<sup>じゆかん</sup>まですべてが生活圏として利用できたのです。

また昆虫の多くが完全変態によって生活史を卵・幼虫<sup>こちゆう</sup>・蛹<sup>まご</sup>・成虫の4段階に分けています。特に幼虫期と成虫期では成長と繁殖の場所・環境を異にすることから、餌と場所の選択肢が様々になっています。

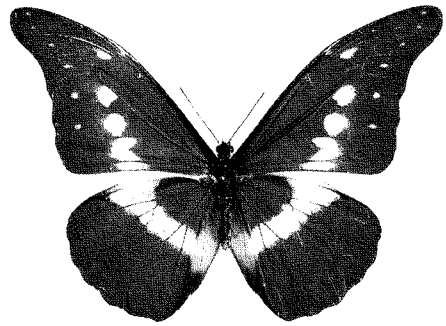
このように考えると、まさに足元は昆虫と言ってよいほど、氷河の高山から砂漠まで、海中を除いた地球のありとあらゆる場所に昆虫が息づいていることになります。

昆虫は種類数も多ければ、多様な環境を利用し、すみわけています。そこにはより様々な生活手段が工夫されており、時に私たちが感嘆するほどの世界を展開してくれます。

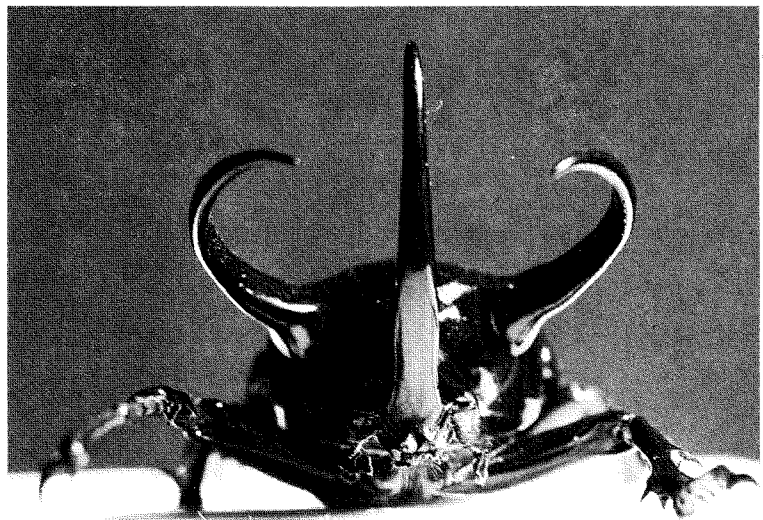
たとえば擬態<sup>ぎたい</sup>と呼ばれる生活戦略は、自身が生き残るために長い進化の歴史の中で、遺伝的本能的に身につけてきたものです。木の葉や枝そっくりに姿を変えたもの、鳥が嫌うへびに似た模様を持つもの、毒草を餌にして体内にも毒を持ち、外敵か

ら狙われないよう進化したものなど、数え上げればきりがなくらいのパターンがあります。そこには信じられないような色もあります。形もあります。大きさもあります。生きていくためとはいえ、あまりにも不思議で絶妙な生活の知恵なのです。

特別展「世界の昆虫博」では、東南アジアをはじめ、南北アメリカ、ユーラシア、アフリカなど、珍しい色や形のチョウ類・甲虫類を中心に展示を行ないます。生活戦略の代表例として擬態も紹介していきます。様々な昆虫の姿、生きざまをまずはじっくりと眺めてください。そして世界の昆虫を通じて、自然界の神秘性と素晴らしさを感じとってもらいたいと思います。夏休みの有意義な体験として……。 (N)



## ヘレナモルフオ



## 自然講座 博物館で学ぶ生物学 その3

大気中に酸素が蓄積されつつある中、生命の舞台はその出現から依然として海洋中に限られていました。30億年という非常に長い時間をかけて原核生物から真核生物、単細胞生物から多細胞生物へと変革を続けてきたのです。そしてついに、古生代カンブリア紀（約5億7千万年前）に入ると生物は爆発的な進化を始めました。

今回は生物が出現し、進化を遂げる背景として地球環境の変化を紹介してきました。引き続き今度は生物が多様性への道を歩んでいく様子を追っていききたいと思います。

### —生物の進化—

約7億年前、まずクラゲのように殻からを持たない生物が現われました。6億年ほど前になると原始的な節足動物の三葉虫が出現し、大繁栄を成しました。その後オルドビス紀からシルル紀に入ると（約4億4千万年前）、頭足類のオウムガイが登場して三葉虫を追い回し、シルル紀からデボン紀にかけて（約4億年前）、最初の脊椎動物である原始的な魚類が出現、軟体動物を餌にこれも繁栄を続けていきました。

このように古生代の海では、主役が交代を続けながら急速に進化が進んでいきました。生物は大型化し、分化し、そして多様化していったのです。従って穏やかだった海も生存競争の場となり、食うもの食われるものといった階層構造が生まれました。つまり、現状の生物界の原型がこの時代に形成されてきたのです。

### —陸上への進出—

シルル紀の終わり（約4億年前）、酸素を十分に含んだ大気とオゾン層の保護により、生物が陸上に向けて最初の一步を踏み出しました。水辺の植物のうち乾燥に耐え、重力に抗して体を支えられる種類が少しずつ上陸を果たしたのです。これらの植物は次第に環境に適応し、大型化しながら内陸へと向かいました。

動物も植物に続きました。最初に昆虫、続いてヒシの発達した総鱗類そつりょうと呼ばれる魚から両性類が出現し、陸上生活に適応を始めました。一方、地球創生以来、不毛の土地であった陸地は地震活動によって新しい地形が作られては侵食され、風化していく過程が繰り返されてきました。この大地に少しずつ植物が分布を始め、やがては地球を緑の惑星に変えていったのです。石炭紀（3億数千万年前）には巨木が密生して大森林も形成されました。当時の気温や湿度が高く、大気中の二酸化炭素量も多く、植物の成長には最適の条件がそろっていたためです。

### —恐竜から哺乳類へ—

その後の地球では、大規模な気候変動が何度も訪れ、寒冷期と温暖期が繰り返し起こりました。何度となく生物の大量死滅が生じ、結果として地球上の生物相は劇的に変化を遂げ、生物界の主役は交代しました。

中生代ジュラ紀から白亜紀にかけては（約2億～6500万年前）、温暖化が進み地球環境が最も長く安定した時代となりました。植物も繁茂し、恐竜を含む大形の爬虫類が陸・海・空で大発展を遂げていました。恐竜は約1億年以上にもわたって地上に君臨していたのです。

6500万年前、突如として地球に何らかの天変地異が起こり、恐竜は絶滅しました。恐竜時代に細々と生活していた哺乳類が新時代の主役となり、それぞれの環境に適応、分化していきました。このいわゆる適応放散によって現在の哺乳類の繁栄がもたらされ、そのうち数千万年前にサルと共通の祖先から出発した一部が400～100万年前のアフリカに猿人として姿を現したのです。後に登場するヒトを頂点として、地球上に生命が誕生してから約35億年を数える間に生物は多種多様な世界を造り上げてきました。「博物館で学ぶ生物学」は、こうして成立した多様な生物界を探求していくのです。（N）

## “武蔵野”の文学、それから

小野 一之

“武蔵野”は、平安時代以来、歌枕として和歌に詠まれ、絵に描かれたりしながら、広漠たる原野、秋草のなびく野原としてイメージが形づくられてきました。現在の埼玉県南部と東京都北部にまたがる広大な台地(武蔵野台地)が“武蔵野”です。

近代以降、こうした“武蔵野”のイメージを若干修正しつつ定着させたのが、国木田独歩の工ッセイ『武蔵野』(1901年)でしょう。「武蔵野の美、今も昔に劣らず」との信念で、国木田は「武蔵野の美」「美といわんよりむしろ詩趣」を追求しました。

① 昔の武蔵野は萱原のはてなき光景をもって絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といってもよい。

として、その雑木林の美しさを描いたのです。

しかし、その後今日に至るまでの“武蔵野”の開発と都市化の波は想像を絶するものがあります。こうしたなか、文学の中の“武蔵野”も時とともに変わっていくのです。小稿では、『武蔵野』以降の“武蔵野”の文学をいくつか拾い読みしながら、その様子を探ってみることにします。

大岡昇平の『武蔵野夫人』(1950年)はよく知られた作品です。「古代多摩川が武蔵野におき忘れた数多い名残川の一つである」野川の源流を、復員兵で従弟の勉と訪ねた人妻道子は、地名“恋ヶ窪”の恋の字に「道々彼女の感じた感情がそれであること」に気がつき、はっとする。そこから始まる二人の悲劇的な恋のエピローグ近くで、勉は、

② 俺が幾度も狭山に登って眺められなかった広い武蔵野台地なんてものも幻想にすぎないじゃないか。(中略)あれほど人がいう武蔵野の林にしても、みんな代々の農民が風を防ぐために植えたものじゃないか。工場と学校と飛行場と、それから広い東京都民の住宅と、それが今の武蔵野だ。

と叫んでいます。“武蔵野”の幻想性と変貌が主人公たちの心象風景を象徴しているようです。

芝木好子の『染彩』(1965年)や『冬の梅』(1991年)も戦後間もない頃の“武蔵野”が舞台です。

③ 家の背後の雑木林は、低い灌木に陽射しが映えている。このあたりも畑は大方形をひそめて住宅地になってしまい、武蔵野のおもかげを宿すのはわずかに雑木林を囲むあたりしかない。周囲に家が建てこむと、彼女はもっと木立の深い、人目に立たない土地へ移りたいと思うようになった。

という『染彩』の主人公葉子は、和服の絵柄の染めに打ち込み、その“武蔵野”の仕事場は、「雑木林も残るほど辺鄙な土地」を「そこが格別安い土地」との理由で買い求めたもの。「風の渡る通路なのが、風当りのはげしい、寒い土地で」「季節風の度に砂埃を舞い上げた」場所でした。『冬の梅』の主人公は少し違います。

④ 小さな家の近くにまだ武蔵野の面影の残る疎林と、細い川の流れる土手の小径があって、冬の季節は黒土に霜が白く立った。中央線の奥のK駅からバスで十五分ほどゆられて、ようやく辿りついた処に建売住宅が六戸建って、五年前その一つに移ってきた時、直子は、「島流しだわ」と思った。

この二人の女性の主人公たちは、いずれも夫の背信行為と変貌する“武蔵野”の風景の中に健全な身を寄せているのです。

『たまらん坂一武蔵野短篇集』(1988年)をはじめ、黒井千次の小説にもよく“武蔵野”が登場します。なかでも『春の道標』(1981年)は、主人公の家が府中市域にあったようなので、少し詳しく見ていくことにしましょう。

高校生明史の家は、「敗戦後の親戚の家での同居生活から、父の勤める役所のつてを頼ってようやく移り住むことの出来た三間だけの小さな住宅」です。農工大学に近い「豊富な樹木と

牧場に似た白い柵を配された土の小道は、武蔵野というよりむしろ高原の避暑地を思わせる風情を漂わせていて、「ちょうど泰西名画の田園風景にでも出て来そうな点景人物の影が道の果てにちらと動く」ような美しい行まいを見せています。明史は、その小道に朝毎に現われる「すらりと気持ちよく伸びた少女の姿態」に夢中になるのです。

時代は、中央線三鷹駅構内で電車暴走事件があった1949年。衝突する電車に「明史は一瞬、大国魂神社の閻夜祭でのぶつかりあうお神輿を思い出します。明史と少女棗が「いつか農業高校の長い塀を過ぎて高々と繁った巨大な櫟のトンネルの中にはいつい」と、「大人が三人で手をまわしてもまわしきれぬほどの櫟の樹の根本に蹲っている板張りの小屋」の奇怪な老姿を目撃したりすることもありました。

「道はそこからやや広くなり、今度はゆるく登り降りして櫟の林の横を抜け、やがて国分寺跡の脇を走る府中街道へとぶつかる」。明史は「しかし街道の向うに広がる柔らかな枯草色の斜面を見ると、ふとその中に足を踏み入れてみたい気持ちに誘われ」、また、「横目に丘を見て重い自転車を走らせながら、いつかここに登って下を眺めてみたいものだ、と彼は坂を通る度に思」うのでした。この丘こそ、やがて明史と棗が二人だけの時間を過ごす場所となり、また、突然の破局の直後に動転した明史が一人で登る丘となるのです。この丘の情景は次のように描かれています。



初夏の雑木林（府中市武蔵台付近）

⑤ 茶色に乾いた葉をまだ枝先一面につけている丈の低い木々の間から、数本の赤松ががっしりとした幹を見せて空に伸び上がっているあたりが丘の頂らしかった。というより、登りつめてみればそこはより高い地層が一段低い地層に向けて張りだしたいわば陸の岬のような場所なのであり、木々ごしに遠く窺える背後には担々とした黒い畑が広がっているようだった。

それでも、南の方を見下せば、薄曇りの空の下にやはり登って来ただけの高みを味わうことは出来た。丘の裾にそって細い道がうねり、畑が遠慮がちに灌木林の間にひらかれ、その向こうに東芝府中工場の灰色の建物の並んでいるのが望まれる。越えて来たばかりの府中街道は左手をゆるい勾配で下り、その先を眼でたどれば府中刑務所の長い塀にぶつかる。

以上にとりあげたいいくつかの作品では、戦後まもない頃の“武蔵野”で、都市化が次第に進行していく光景が、“武蔵野”に移り住んだ新しい住民の目を通して活写されているといえます。こうした“武蔵野”の変貌が、主人公たちの変わらぬ意志とは対照的な、相手や社会の移ろいを象徴しているようにも思えます。国木田の描いた“武蔵野”は、このようにしてとめどもなく変貌をとげてきたといえるでしょう。

こうした中で、“武蔵野”という言葉のイメージが、作品に独特の雰囲気を与えていることも見逃すわけにはいきません。このことは、ここでとりあげた小説の文庫本裏表紙のキャッチコピーを見てもわかります。「櫟や檜の樹の多い静かなたたずまいの武蔵野を舞台に…」「木枯吹く武蔵野の林のなかですべての情念を…」「武蔵野の美しい四季の移ろいを背景に、甘く、ほろ苦い…」などなど。

#### ◇引用した作品

- ① 国木田独歩『武蔵野』岩波文庫 9p.
- ② 大岡昇平『武蔵野夫人』新潮文庫 193p.
- ③ 芝木好子『染彩』中公文庫 143p.
- ④ // 『冬の櫟』新潮文庫 33p.
- ⑤ 黒井千次『春の道標』新潮文庫 143p.

カメラ  
アングル

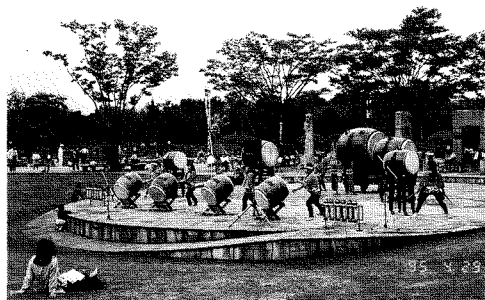
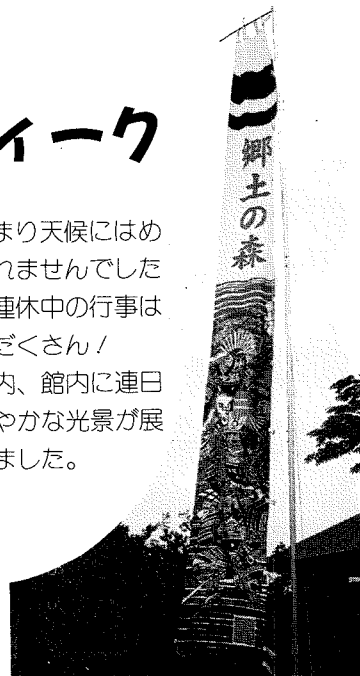
# '95 郷土の森の ゴールデンウィーク



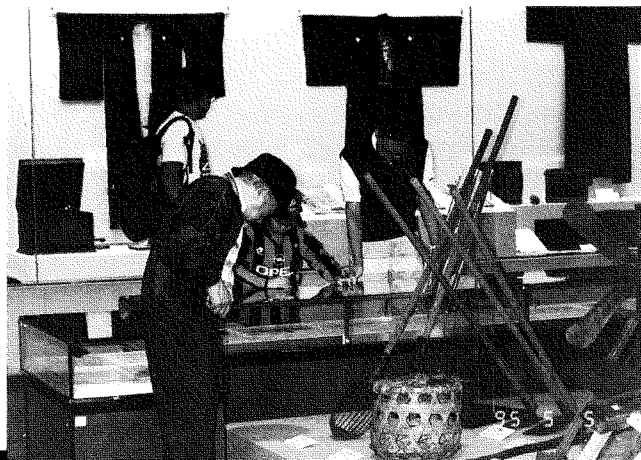
ギャラリーコンサート (5月7日)

あまり天候にはめぐまれませんでしたが、連休中の行事はもりだくさん!

園内、館内に連日にぎやかな光景が展開しました。

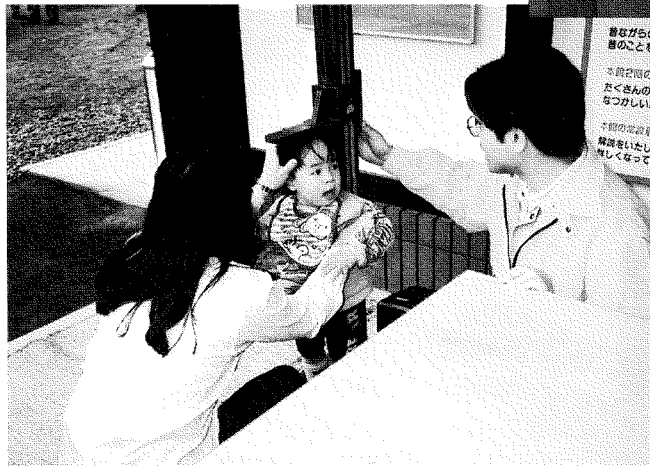


武蔵国府太鼓演奏会 (4月29日)



収蔵品展

(4月29日～5月28日)



せいくらべ (5月5日)

ガマの油売りもまたまた登場!

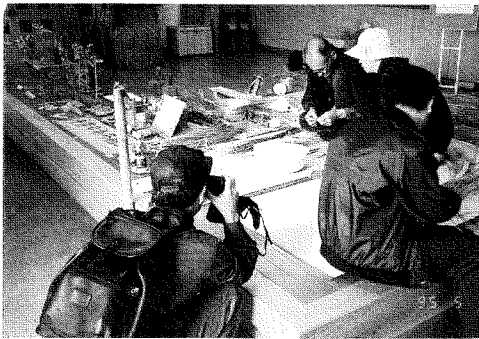




## 郷土の森のゴールデンウィーク

### 体験館編

体験館では行事が目白押しでした。  
参加者の真剣なまなざしが、演者・講師をも熱くさせたようです。  
風車づくり(左)・ワラ細工実演(左下)  
折紙教室(下)



## 【平成6年度の利用状況】

(H6.4.1~H7.3.31) 開園日数332日

区 分		有 料		減 免	合 計
		一 般	団 体		
入 園 者	大 人	162,324 <sup>人</sup>	11,340 <sup>人</sup>	12,803 <sup>人</sup>	186,467 <sup>人</sup>
	子 供	41,396	19,386	2,358	63,140
	小計	203,720	30,726	15,161	249,607
博物館入館者	大 人	25,804	5,807	3,888	35,499
	子 供	8,367	13,728	212	22,307
	小計	34,171	19,535	4,100	57,806
プラネタリウム 観 覧 者	大 人	41,097	4,134	1,566	46,797
	子 供	20,584	17,923	1,527	40,034
	小計	61,681	22,057	3,093	86,831
合 計		299,572	72,318	22,354	394,244

# [平成6年度 寄贈・寄託資料一覧表]

## ■寄贈資料

	寄 贈 者	資 料 名	分類	数量	備 考
1	甲 田 安 子	蓄音機とレコード	民俗	1 括	
2	高 木 光 子	五升榧、メカイ他	民俗	66	
3	小 沢 サダ子	一升榧、丸火鉢他	民俗	4	
4	石 阪 文 夫	火 鉢	民俗	3	
5	高 木 錠 助	柏餅づくり	民俗	1	
6	横 山 節	最新大世界地図（昭和17年）他	民俗	12	
7	内 藤 久 男	古 文 書	歴史	1	
8	清 野 シゲコ	大國魂神社昇格五十年祭記念写真帳	歴史	1	昭和9年刊
9	小 勝 誠 一	高札、古文書他	歴史	106	

## コ ラ ム

昨年のことですが、西日本に広く生息するムギツクという淡水魚が、別の魚のなわばりに産卵し、卵を守らせていることを確認する記事が新聞に載っていました。いわゆる「たくらん托卵」と呼ばれるこの行動は、別種の鳥の巣に卵を産みつけるカッコウに代表される鳥の世界で有名ですが、国内の魚類に確認されたのは初めてのことでした。世界に目を移せば、アフリカ・タンガニーカ湖のナマズの一種など、魚の世界にも托卵の例はあるようですが、日本ではとにもかくにも第1号の報告だったのです。

ムギツクは、コイ科で体長約13センチ。産卵期間は5月中旬から7月頃までで、群れをつくり、ヨシの茎や石の下などに一匹あたり約100個の卵(直径約2.1ミリ)を産みます。今回の報告では、兵庫県中部の揖保川支流などで、スズキ科のオヤニラミの卵といっしょに、同じヨシの茎などに産みつけられているのが計約400例、確認されたそうです。オヤニラミのオスは、メスが産んだ卵を外敵から守る性質を持ち、かつ産卵期間がムギツクと重なっていることから、

このような関係が生まれたのでしょうか。巧みな生活戦略の一例です。

博物館は大切な資料を預かり、未来永劫保管し続ける場所です。まさに文化遺産の托卵場所とも呼べる施設の情報源として、「あるむぜお」を今後ともよろしく！(N)



## 郷土の森の新刊紹介

### ■府中市郷土の森紀要 第8号

「府中市郷土の森のクモ(II)」「府中市域野鳥目録<1970~1994.10>」「中世武蔵府中の時宗道場」「武蔵府中長福寺の板碑」の研究論文掲載  
B 5 1400円

### ■府中市郷土の森展示解説書・増刷出来!

府中の歴史・民俗・自然が満載。博物館常設展示室の内容がわかりやすく学習できます。オールカラー版。  
B 5 800円



## ＝最近の発掘調査から＝

みなさんは、市内を歩いている時、いたるところで発掘調査が行われているのを見かけたことがあると思います。こうした発掘調査には、近年行われた府中駅南口再開発に伴う大規模なものもありますが、多くは1000㎡に満たない小さな面積を対象としています。今回は、このような小面積の調査の意義についてお話していきたいと思います。

さて、府中市の面積は約2,940km<sup>2</sup>で、このうち遺跡の面積は約718,750㎡に達しています。特に、武蔵国府と密接な関係にあると考えられる武蔵国府関連遺跡は、甲州街道に沿って展開しており、今日の市街地の地下に眠っている状況にあります。発掘調査は、土地の所有者をはじめ、近隣の住民のご協力を得て進めていますが、府中のような街中での発掘調査の場合、個々の調査面積は極めて小さく、一カ所の調査で遺跡の全体像をつかむことは困難といつてよいでしょう。

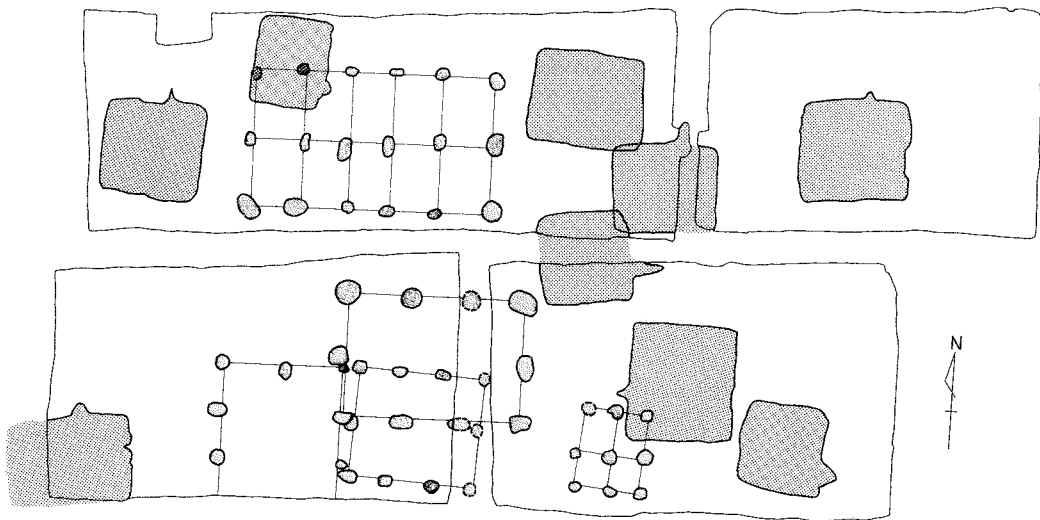
しかしだからといって、小面積の調査をしなくてもいいと言うことにはなりません。例えば、1軒の竪穴住居跡が4つの土地にまたがっている様なこともあります。この時、4分の3まで発掘しても、残りの4分の1を調査せずに壊してしまえば、その部分は想像するしかありませ

ん。調査できなかった部分が特殊な形をしていたかも知れませんが、そこに住居跡の機能や年代を決定する貴重な遺物があったかも知れないのです。同じように、ある調査地区では一面にたくさんの竪穴住居の跡があるのに、隣の調査地区では全く竪穴住居の跡が見つからないこともあります。この場合、先の調査地区が居住域であり、これに隣接した調査地区は畑や空地などであったと考えることが可能でしょう。

ところで、府中市では市内の遺跡、特に武蔵国府の跡を具体的に解明することを大きな目標として1975年に「府中市遺跡調査会」を発足させ、発掘調査とその成果を公表してきました。記念すべき最初の調査は「分梅町1丁目公会堂地区」でした。そして、現在までに800ヶ所を越える発掘調査を積み重ねてきました。この間の成果の一部は発掘調査報告書としてまとめ、また本誌でも紹介してきました。

前述の通り、個々の調査面積が小さいため、一つ一つの調査区からの成果からは広大な遺跡の全体像を描くことは困難ですが、巨視的に見れば点でしかない一つの調査区の隣接地を発掘し、さらにまた隣接地を発掘することによって、点を線に、そして面に広げていく作業をしているのです。いつの日か、国府の時代の街の住宅地図が描けることを夢んでいます。

(Nビル地区の調査から 和田)



あれこれ

## —災害と考古学— 地震の巻

1995年1月17日の早朝、阪神地方は激しい揺れに見舞われました。一部地域では震度7にも達した直下型の大地震です。その被害の大きさについては、改めていうまでもないでしょう。

この大震災をきっかけに、多摩地区にも断層があることを知りました。この断層が活動したらと不安にかられるのは私一人ではないことと思います。

さて、「災害と考古学」といっても、多くの人は両者にどんな関係があるのか理解できないことでしょう。まずは今回は地震の巻です。

大きな地震はプレート境界や活断層という決まった場所で、そのひずみが限界に達した時に起こるのだそうです。しかもその発生は一定のサイクルを保っているそうです。したがって、過去にどこでどの程度の地震が発生したか、これを知ることが将来の地震予知に役立つことになります。

過去の地震の存在を知る方法は、3つあります。一つはもちろん当時の人々の書き残した記録です。もう一つは、活断層そのものを掘って、地質学的に検証する方法です。残る一つが、遺跡の発掘調査の現場で、地震の爪痕を見出す方法です。地割れ、地滑り、液状化など大地震の痕跡は大地に確実に刻み込まれます。こうした地震の痕跡を遺跡のなかから見つけ出すのです。しかも、遺跡は過去の人々の生活の場ですから、地震痕跡がいつ頃起こったものか、さらにその生活の場が被災しているのならそこでの被害状況をも知ることが出来ます。

これらの3つの方法によって得られたものを総合することによって、いつ、どこで、どの程度

の地震が起こったのか、さらにそれぞれの活断層やプレートの活動のサイクルを知ることが出来ます。

“幸いに”というべきでしょうか。府中市域ではまだこうした地震痕跡は見つかっていません。しかし、1923年の関東大震災は言うに及ばず、1855年の安政地震、1703年の元禄地震といった関東地方を襲った大地震がありました。さらに古くは、818年「相模。武蔵。下総。常陸。上野。下野等国地震。山崩谷埋数里。圧死百姓不可勝計。」(『類聚国史』)、878年「関東諸国地大震裂。相模武蔵特為尤甚。其後五六日。震動

未止。公私屋舎一無全者。或地窪陷。往環不通。百姓壓死不可勝記。」(『日本三代実録』)という記録もあります。この府中にも地震の爪痕が残っている可能性はかなり高いといつてよいでしょう。特に878年の地震は武蔵・相模の被害が大きく、公私の建物が倒壊したようですから、国府のまち、府中の被害も尋常ではなかったと考えられます。

こうした地震痕跡を見つけ地震学者に情報を提供することも、これからの考古学の大きな役割といえそうです。

ちなみに、地震の発生となます鰻が関連づけられたのは江戸時代のこと。それ以前の人々はどのように考えていたのでしょうか。(F)



### あるむせお 第32号

al museo イタリア語  
“博物館で” “博物館にて” の意  
発行日 1995年6月20日  
発行 (財)府中文化振興財団  
府中市郷土の森  
〒183 東京都府中市南町6-32  
☎0423-68-7921